Press Release

日文研

令和3（2021）年　2月 15日

報道関係者
地域広報関係者　各位

国際日本文化研究センター

ウィリアム・アダムス（三浦按針）関連新史料発見について

国際日本文化研究センターは、オランダのハーグ国立文書館およびライデン大学文学部と共同でハーグ国立文書館所蔵平戸オランダ商館文書の研究調査を進めて来ましたが、このたび、本調査の過程で、初代平戸オランダ商館長ジャック・スペックスがウィリアム・アダムス（三浦按針）に宛てた書状の控え4通を新たに発見しました。

書かれた場所と日付しか記されていない複数の書状控えの発信者と受信者が特定できたことは、当該史料を活用する上で大きな意義を持ち、さらに、以前の書状内容の要約が記されているおかげで、伝存していない書状の内容までもある程度把握できます。

今回の発見によって、これまで手掛かりとなる史料がほとんどなかった1611年から1612年までの間のアダムスの動向の空白期間を埋めることができたのは大きな成果であります。

別添に以下の4つの項目を立て、発見について詳細に説明いたします。

① アダムス宛書状の控えが含まれている綴帳

② アダムス関連史料の内容

③ 今回の発見に至った経緯

④ 今回の発見の意義

＊本発見は科学研究費助成事業「近世初期における日蘭関係の構造に関する基礎的研究」（課題番号19K01010）の助成を受けて行った研究の成果です。
研究代表者：国際日本文化研究センター研究部教授　フレデリック・クレインス

添付：　別添　　ウィリアム・アダムス（三浦按針）関連新史料発見について（クレインス教授文責説明資料）　計7枚

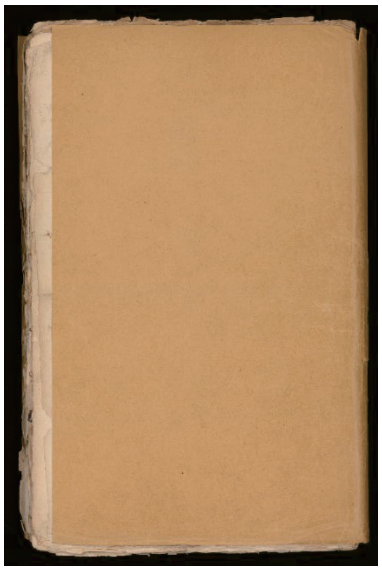
本件お問い合わせ先：
国際日本文化研究センター　研究部教授　フレデリック・クレインス
E-mail: frederikcryns@nichibun.ac.jp　TEL: 075-335-2012（総務課企画評価・広報係）

別添

ウィリアム・アダムス（三浦按針）関連新史料発見について

このたび、国際日本文化研究センターは、オランダのハーグ国立文書館およびライデン大学文学部と共同で進めています、ハーグ国立文書館所蔵平戸オランダ商館文書の研究調査の過程で、初代平戸オランダ商館長ジャック・スペックスからウィリアム・アダムス（三浦按針）に宛てられた４通の書状の控えを新たに発見しました。

今回発見された史料はハーグ国立文書館所蔵オランダ東インド会社文書史料群の中に含まれる一冊の綴帳（整理番号 VOC1054）に綴じられていました。この綴帳には、1607 年から 1612 年までの間にオランダ東インド会社の各商館で作成されたさまざまな書状や書類の写しや控えが合綴されています。当時、オランダ東インド会社の重役の参照用としてオランダ本部に送付されました。



アダムス宛書状の控えが綴じ込まれたハーグ国立文書館所蔵綴帳の表紙

①　アダムス宛書状の控えが含まれている綴帳

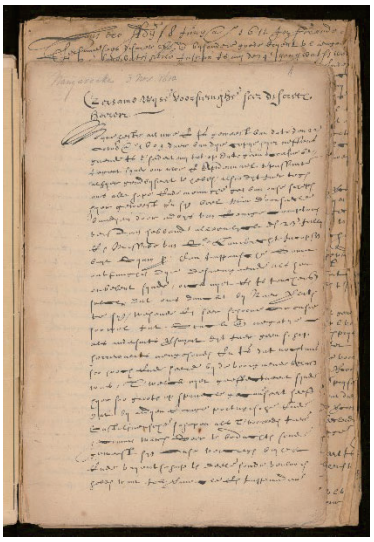
1602 年に設立されたオランダ東インド会社は毎年アジアへ艦隊を派遣していました。アジアでは各地に商館が設立されました。日本にも 1609 年に平戸（現・長崎県平戸市）にオランダ商館が設立されました。

オランダ東インド会社設立当初は、アジア各地の商館を統括する拠点がまだ設置されていませんでした。アジアへ派遣された艦隊は、オランダへ帰還する際、オランダの本部にいる取締役会（いわゆる 17 人会）のための参照用として、各商館から集められた社内文書をオランダへ持ち帰っていました。

アダムス宛書状の控えが含まれている綴帳は、アジアから帰還するオランダ東インド会社の艦隊が持ち帰った、1607 年から 1612 年までの間にアジアの各商館で作成された文書を一冊に綴じたものです。同綴帳に含まれる各文書は、関連商館分ごとにまとまって配置されています。パタニ商館、コーリコード商館、シャム商館、日本商館、ジョホール商館という順番で各商館ごとに文書が仕分けられています。同綴帳には約 1500 ページ分の文書が綴られています。統一したページ付けはありませんが、文書のまとまり

ごとに独自のページ付けのあるものもみられます。

平戸オランダ商館関連文書は同綴帳を 3 分の 2 くらいめくったところに綴じられています。分量としては、23 丁（46 頁）分あります。丁付けもされています。内訳は、平戸オランダ商館の初代商館長ジャック・スペックスが送信した書状の控え 10 通と第二代商館長ヘンドリック・ブラウエルが送信した書状の控え 2 通です。



綴帳に綴られている日本オランダ商館文書群の最初のページ

この綴帳に含まれる平戸オランダ商館関連の各書状の送受信情報は下記の通りです（丸数字は便宜上整理のために付けた番号です）。

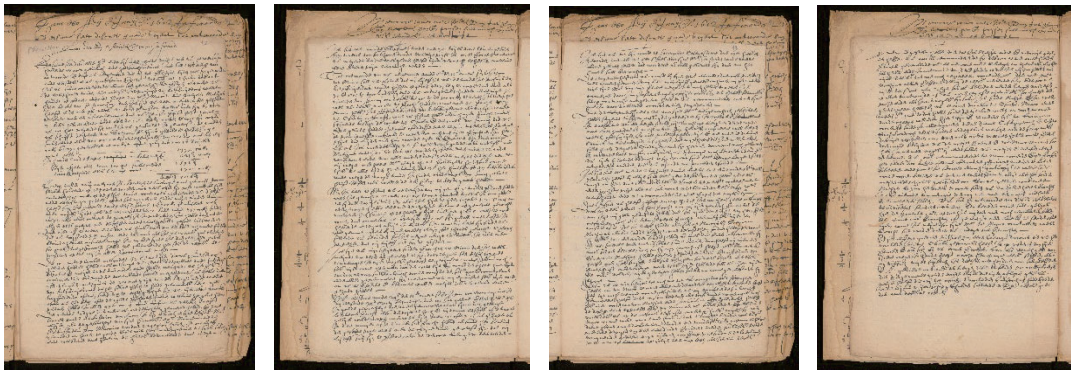
①ジャック・スペックスよりアムステルダムの十七人会宛書状、長崎、1610 年 11 月 3 日（1–5 丁）
②ジャック・スペックスよりシャム商館長ランベルト・ヤーコプセン・ヘイン宛書状、平戸、1610 年 11 月（6–9 丁）
③ジャック・スペックスよりシャムにいるランベルト・ヤーコプセン・ヘイン宛書状、平戸、1610 年 11 月 8 日（9 丁）
④ジャック・スペックスよりウィリアム・アダムス宛書状、平戸、1612 年 4 月 5 日（12–13 丁）
⑤ジャック・スペックスよりウィリアム・アダムス宛書状、平戸、1612 年 6 月 8 日（10 丁および 15 丁表、同書状の日付は 1611 年 6 月 8 日となっていますが、誤記です）
⑥ジャック・スペックスよりマチアス宛書状、平戸、1612 年 6 月 8 日（14 丁および 11 丁）
⑦ジャック・スペックスよりウィリアム・アダムス宛書状、平戸、1612 年 6 月 20 日（16 丁）
⑧ヘンドリック・ブラウエルよりパタニ商館長ヘンドリック・ヤンセン宛書状、ローデ・レーウ・メット・ペイレン号にて、1612 年 7 月 13 日付（22–23 丁）
⑨ジャック・スペックスよりウィリアム・アダムス宛書状、平戸、1612 年 8 月 25 日（17 丁）
⑩ジャック・スペックスよりパタニ商館長ヘンドリック・ヤンセン宛書状、平戸、1612 年 11 月 2 日（18–19 丁）
⑪ジャック・スペックスよりアユタヤ商館のコルネーリス・ファン・ナイエンローデおよびマールテン・ハウトマン商務員宛書状、平戸、1612 年 11 月 3 日（20–21 丁）
⑫ヘンドリック・ブラウエルよりパタニ商館宛書状、日本、1612 年 11 月 4 日（23 丁）

②　アダムス関連史料の内容

以上の 12 通の書状のうち、④, ⑤, ⑦, ⑨の 4 通がアダムス関連史料です。これらはいずれも初代平戸オランダ商館長ジャック・スペックスからウィリアム・アダムスに宛てられたものです。

これら 4 通のアダムス宛の各書状の内容は下記の通りです。

④ジャック・スペックスよりウィリアム・アダムス宛書状、平戸、1612 年 4 月 5 日（12–13 丁）



この書状の内容はスペックスがアダムスから受け取った 3 通の書状に対する返答です。アダムスから送られた 3 通の書状は現存していませんが、スペックスが記した書状の内容から、アダムスがいつ、どこから 3 通の書状を発信したかが分かります。それら各書状の発信場所・日付は次の通りです。
Ⓐ大坂にて、1611 年 11 月 28 日付
Ⓑ京都にて、1611 年 12 月 11 日付（原文では、和暦 11 月 8 日と表記）
Ⓒ駿府にて、1611 年 12 月 27 日付（原文では、和暦 11 月 24 日と表記）
スペックスの書状の書き方の特徴として、アダムスからの書状の内容を要約した上で、それに対する返答や意見を述べるという形が取られています。そのため、スペックスの書状を通じて、もとのアダムスの書状で記されていた内容を把握することができます。

まず、アダムスの 1611 年 11 月 28 日付の書状Ⓐでは、アダムスがオランダ東インド会社のために大坂で行った売買取引について詳細に報告されていたことが分かります。また、ルソンからのスペイン大使による家康への謁見やオランダのマウリッツ王子に関する情報も伝えられています。

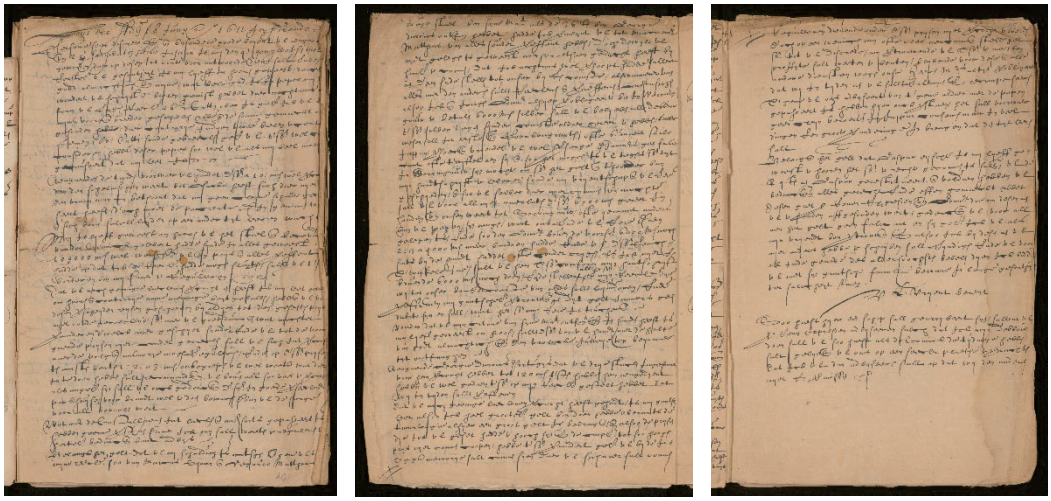
また、アダムスの 1611 年 12 月 11 日付の書状Ⓑには、堺や京都におけるオランダ東インド会社のための取引について報告されていたことが分かります。

さらに、アダムスの 1611 年 12 月 27 日付の書状Ⓒには、アダムスが駿府に到着した後の出来事について詳細に報告されていることが分かります。スペックスの書状を通じて、その報告では、アダムスが家康に謁見し、オランダ東インド会社の代理としてオランダ人の贈物を家康に献上したことが記されていたこと、また、スペイン人が、1609 年にオランダとスペインとの間の停戦協定（いわゆる十二年停戦協定）が締結されたことを否定し、アダムスを家康の面前で嘘つきと非難したことが記されていたことが分かります。

なお、当時スペックスが日本を無断で出国したとの噂が流れていたのですが、アダムスはそれを家康の前で否定し、スペックスのために弁明したことへの言及もみられます。

この④の書状にみられるスペックスの返答の内容は主に商品売買関係のものですが、このほかに、秘密裡に佐渡の灰吹銀の入手方法を調べてくれるようにとの依頼をしている記述もみられます。

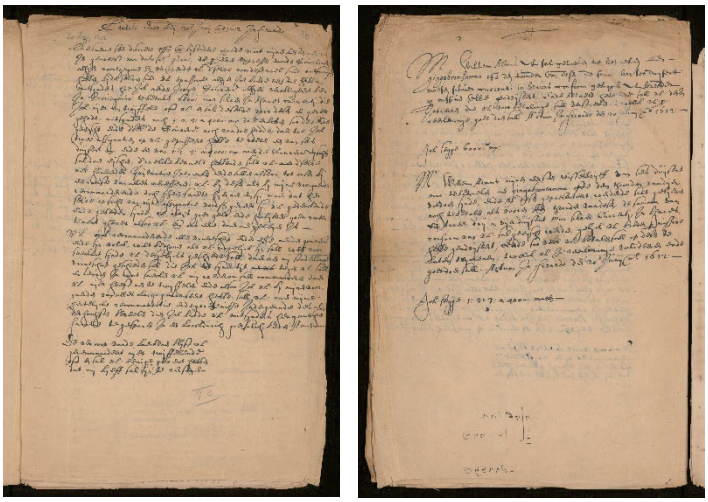
⑤ジャック・スペックスよりウィリアム・アダムス宛書状、平戸、1612 年 6 月 8 日（10 丁および 15 丁表、同書状原文の日付は 1611 年 6 月 8 日となっていますが、誤記です）



この書状はアダムスから受信した 1612 年 4 月 29 日付（原文では、和暦 3 月 29 日と表記）の書状への返答です。④の書状と同様に、アダムスがオランダ東インド会社のために行った取引に関して報告している内容です。この中で特記すべき点は、アダムスが徳川秀忠に銀 109,000 匁分の鋼鉄および砂鉄を届けたという記述です。これは、アダムスがオランダ東インド会社と徳川幕府との間の取引を仲介していたことを示します。また、スペイン人の貿易実態、禁教令やカトリック神父たちの動向に関する情報をアダムスがオランダ人に伝えていたことも同書状から明らかになります。さらに、スペックスが 1611 年に駿府で家康に謁見した際に家康から贈られた刀をアダムスが預かっているという記述もみられます。

また、この書状の中で、スペックスはアダムスに対して、平戸藩主・松浦隆信が駿府に到着した際にオランダ東インド会社の代理として銀 6000 匁を支払うよう依頼しています。そして、この金額は、アダムスが預かっているオランダ東インド会社の商品の売り掛け代金から差し引くようにとの指示も書かれています。

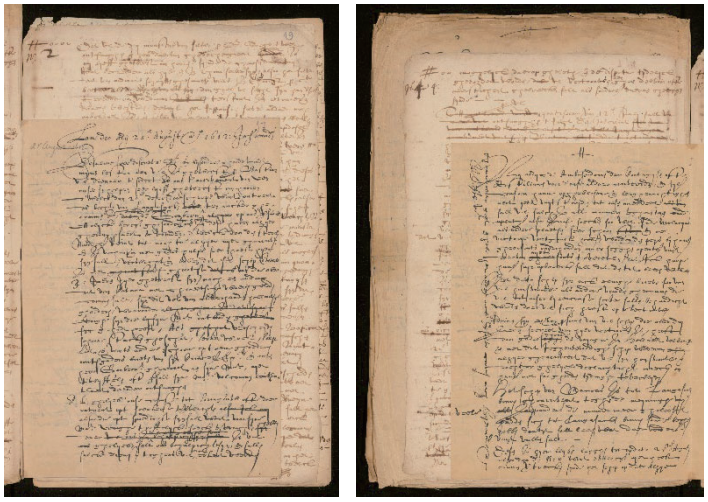
⑦ジャック・スペックスよりウィリアム・アダムス宛書状、平戸、1612 年 6 月 20 日（16 丁）



この書状には、前記の書状⑤において言及のあった、平戸藩主・松浦隆信への銀 6000 匁の支払い依頼についての詳細な説明が記されています。また、スペックスはアダムスに対して、平戸藩主およびその家臣たちに対してできる限りの友情と敬意を示してくれるようにとも頼んでいます。

この書状の裏面には、アダムスに宛てた 6000 匁の為替手形および 1000 匁あるいは 2000 匁、3000 匁、4000 匁の為替手形の控えもみられます（右上の写真参照）。

⑨ジャック・スペックスよりウィリアム・アダムス宛書状、平戸、1612 年 8 月 25 日（17 丁）



この書状は、アダムスにオランダ船の到着を知らせるために書かれたものです。来航したオランダ船の積荷の説明の後に、オランダのマウリッツ王子およびオランダ東インド会社の総督から家康と秀忠に宛てられた書簡が届いたことにも言及されています。また、オランダ人が駿府で家康に謁見に行くことを告げ、謁見に際してのアダムスからの協力を依頼しています。さらに、スペイン人とポルトガル人の使節がオランダ人よりも前に駿府に到着した場合、彼らの主張を否定してくれるようにとも頼んでいます。
このほか、同船を通じてアダムスのイギリスの妻（メアリ・ハイン）および他の友人たちからの書状も平戸商館に届いており、それらをアダムスに渡す予定であるとのことも伝えられています。また、リーフデ号の

元乗組員の一人であるアドリアーン・コルネーリセンの再来日についても記されています。

③　今回の発見に至った経緯

国際日本文化研究センターは、2015 年以来オランダのハーグ国立文書館およびライデン大学文学部と共同でハーグ国立文書館所蔵平戸オランダ商館関連文書の調査を行っています。また、この三機関での共同研究を促進するために、同三機関は 2016 年 12 月 9 日に学術交流協定を締結しました。

この協定に基づき、国際日本文化研究センターおよびライデン大学文学部は、ハーグ国立文書館から文書のデジタル・データの提供を受け、その翻刻・和訳・研究分析を共同で行っています。

今回のアダムスの書状は和訳作業を進めている時に発見しました。これらの書状には送信元も宛先も表記されていません。唯一記されている情報は書かれた場所と日付のみです。また、下書きとして書かれていますので、正式な書状としての体裁がきちんと整っていません。さらに、書状⑤には日付の誤記がみられる上に、丁の綴じ順序に間違いがある関係で、送信元と宛先を特定することは容易ではありませんでした。

しかし、書かれた場所と日付、書状の内容、そして、書状⑥の 1612 年 6 月 8 日付マチアス宛書状の内容から、これらの書状はスペックスからアダムスに宛てられたものであると判明しました。スペックスはマチアスという助手を大坂に派遣していました。このマチアス宛の書状において、スペックスはアダムスとの間のやりとりについて詳細に書き記しています。マチアスへの書状の内容とアダムス宛の書状の内容が一致していることを手掛かりに、上記の 4 通の書状との関連性を見出し、それらがアダムスに宛てられたものであるとの発見に繋がりました。

なお、前述の共同研究の成果物としてライデン大学出版会から翻刻を、国際日本文化研究センターから和訳を刊行する予定です。研究対象となっているのは、1609 年～1633 年の間に作成された送受信書状、決議録、公務日記の約 2000 頁分です。現在、そのうち約 1500 頁分の翻刻および約 500 頁分の和訳が完成しています。

和訳については、第一冊の刊行を 2021 年度中に計画しています。この第一冊にはスペックス受信書状綴帳（1614 年～1616 年）の和訳が収録される予定です。第二冊の刊行は 2022 年度中に計画しています。第二冊には、1609 年から 1616 年までの初期の平戸オランダ商館の送受信書状や参府日記、決議録の和訳を収録される予定です。この第二冊には今回新たに発見されましたアダムスの書状の和訳も収録されます。

④　今回の発見の意義

これまでにアダムスの発信書状は 11 通が伝わっています。また、アダムスの航海日誌 4 冊とイギリス東インド会社の雇用契約書や遺書ならびにアダムスの受信した書状についても 7 通が知られています。これらの史料に加えて 1611 年のスペックスの駿府と江戸への参府日記、平戸イギリス商館長日記などのほかの史料を元にして、おおよそのアダムスの動向を再構築することができます。しかし、1611 年から 1612 年までの間のアダムスの動向については、これまで手掛かりとなる史料がほとんどありませんでし

た。今回の発見によって、アダムスの足取りの空白期間を埋めることができました。

書かれた場所と日付しか記されていない複数の書状控えについて、関連書状間の内容比較を通じて発信者と受信者が特定できたことは、当該史料を活用する上で大きな意義を持ちます。さらに、発信者が受信者の以前の書状内容の要約を書き記してくれているおかげで、伝存していない書状の内容までもある程度把握できることに繋がります。

具体的には次の通りです。アダムスは 1611 年にスペックス一行を駿府で家康に、江戸で秀忠に謁見させた後、スペックス一行に同行し、浦賀と駿府を経由して、一緒に平戸へ行き、そこでしばらく滞在した後に、1611 年の秋に平戸から出発して、オランダ東インド会社の商品を携えて、大坂と京都を経由して駿府に戻ったという事実が把握できます。

また、アダムスはこの時期、日本国内においてオランダ東インド会社の代理として活発な売買活動を行っていたことも明らかとなりました。さらに、アダムスが徳川幕府とオランダ人との間の鉄の大規模取引の仲介を行っていたことも判明しました。なお、書状の内容からは、アダムスが大坂や京都でオランダ東インド会社の代理を務めた際、現地の日本人商人やポルトガル人などの複数のヨーロッパ人の国際的なネットワークを駆使していたことも分かってきました。

さらに、平戸オランダ商館長スペックスと密接に文通を行い、禁教令、スペイン人、ポルトガル人、神父たちの動向についての詳細な情報をスペックスに伝えていたこと、また、家康に世界情勢に関する情報を伝えて、スペイン人のもたらす情報を否定し、家康の前でスペイン人と口論したという実態も浮かび上がりました。

今回新しく発見されたアダムス宛書状 4 通の分析に加えて、これまでほとんど研究されてこなかったアダムス関連の数多くのオランダ側史料の研究成果の詳細は、2 月 8 日に刊行されたフレデリック・クレインス著『ウィリアム・アダムス—家康に愛された男・三浦按針』（ちくま新書）で紹介されています。

同書は、徳川家康の外交顧問となったイギリス人舵手ウィリアム・アダムスが何者だったのか、そして江戸でスペイン、ポルトガル、オランダ、イギリス各国間の国際衝突が起こった時にアダムスが家康の側近としてどのような行動を取ったのかを一次史料を元に解明しようとしており、アダムスの生涯から世界史の中の日本をとらえ直そうとしています。

＊本発見は科学研究費助成事業「近世初期における日蘭関係の構造に関する基礎的研究」（課題番号１９Ｋ０１０１０）の助成を受けて行った研究の成果である。

（文責　国際日本文化研究センター研究部教授　フレデリック・クレインス）